

## 内部精度管理のアクションプラン

～「one data, platinum data」への取り組み～

◎河合 麻衣子<sup>1)</sup>、市川 潤<sup>1)</sup>、魚住 佑樹<sup>1)</sup>、林 克彦<sup>1)</sup>、伊藤 康生<sup>1)</sup>、志水 貴之<sup>1)</sup>、舟橋 恵二<sup>1)</sup>、河野 彰夫<sup>2)</sup>  
JA 愛知厚生連 江南厚生病院 臨床検査技術科<sup>1)</sup>、JA 愛知厚生連 江南厚生病院 内科<sup>2)</sup>

### 【はじめに】

当臨床検査技術科は、各種内部精度管理を行った上で、年3回以上外部精度管理調査に参加している。外部精度管理調査の前には精度管理委員会を開催し、検査精度が保たれるように邁進している。しかし、平成28年度の外部精度管理調査において、極一部の項目が基準範囲を満たさなかった。そこで、全部門において更なる精度向上を目的とし、「one data, platinum data」のスローガンを掲げ、更なる内部精度管理の充実を図ったので報告する。

### 【対象・方法】

対象は全技師であり、技師長も例外としない。

精度管理委員会にて各部門の現状と課題を把握し、大きく2つの行動計画を策定した。

#### ①Microscopic survey

微生物、病理、血液、一般部門における“目の標準化”を目的とした。一例を挙げると、微生物部門において、抗酸菌染色でガフキー2号相当の喀痰を検鏡し、菌体を観察できるかどうかを出題した。

#### ②Consensual validation

生化学、生理、輸血部門を中心とし、“手の標準化”を目的とした。一例を挙げると、生化学部門において、ピペット操作など一連の手技を確認した。なお輸血部門においては、緊急時に備え日当直担当技師全員を対象とし、用手法の操作手順チェックを実施する仕組みも確立した。出題は各部門の担当技師が行った。実施後は結果検討会を行った上で報告書を作成し、精度管理委員会に提出した。精度管理委員会が精査し、指導が必要であると判断された技師に対しては各部門の責任者が適正な啓発を行っている。

### 【考察】

臨床に正確なデータを提供することは臨床検査技師の責務である。本取り組みを継続することにより、当院全技師の技能や知識の水準が高まり、検査室全体の精度向上が期待できると思われる。現在、本取り組みの効果判定方法を精度管理委員会で模索中である。

連絡先：0587-51-3333 内線：2359